
永遠に

クラナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠に

【Nコード】

N1257E

【作者名】

クラナ

【あらすじ】

小野祐介が春休みに出会った女の子大森真央。この出会いが祐介の生活を大きく変えることになる。祐介と真央二人の心境が少しずつ変わっていく。

1. 出会い

俺は、今病院のベッドにいる　肺炎だそうで大事をとって一週間くらい入院だそうだ

せつかくの春休みが台無しだ　まあまだ始めのほうだからよかったかもしれない

「じゃあ、祐介　お母さん仕事行ってくるね」

「はいはい　いってらっしゃい」

俺の家は、母さんが働いている　俺が小さいときに父さんは、交通事故で死んでしまった

「小野さん点滴変えますよ」

俺にすることといえば点滴をかえるくらいなので基本的に自由である

まあ熱があるので動く気にもならない　肺炎というだけのことはある　個室なので親が来るとき以外はほとんど一人ぼっちである

ずっと寝てるだけだから暇だな

コンコン

誰だ？ 「どうぞ」

入ってきたのは、・・・誰？ 部屋間違えたのかな

「こんにちは」

いきなりのあいさつに驚いた でもとりあえず俺も返しとかないと

「こんにちは えーっと誰かな？」

見た目からいって俺より年下っぽいような気がする さらっとして髪が長いな

「私は、大森 真央 私もここに入院してるの」

どうやら、俺が新しく入ってきたからどんなやつか見に来たのかな

「俺は、小野 祐介 昨日から入院してる　それで、何か用かな？」

「別に用は無いんだけど　ずっとこの病院お年寄りしかいないから
学生さんが入ってきたって聞いたから来てみたの」

確かにこの病院はお年寄りばかりだ　話相手にするには年が違い過ぎて
かみ合わないだろう

「どれくらいここにいるの？」

「うーん分かんない　忘れちゃった」

忘れるなんてことあんのかよ

「祐介君は今何歳なの？」

「俺は、この春で高校2年　だから今は16歳」

「偶然く同じだね」

嘘だろ 明らかに年下に見えるぞ 背も小さいし 150センチあるかないかくらいだと思う人は見た目で判断してはいけないとあらためて思った

「祐介君はどこの高校に通ってるの？」

俺のことをよく聞いてくる子だな よほど暇だったのだろう 俺も暇つぶしにはちょうど良いかも知れない

「楠高校だよ」

普通の公立高校である

「私もそこだよ」

ありえない 高1のときこんな子いなかったはずだ 大概の子の名前と顔くらいは一致できる

「不思議そうな顔してるね しょうがないか 私は、入学してすぐに入院しちゃったから知らないよね ほとんど学校に行っていないのだから年は同じでも学年はひとつ下になるの」

「そうなんだ」

そんなに長く入院していたんだ 見た目にはすごく元気そうに見えるのに

「あっそろそろ行かないと先生に怒られちゃう また来るね 祐介君」

行ってしまった どの部屋に入院してるのかな 今度は俺のほうから行ってみようかな

でも今はそんな元気は無い 話すのも結構しんどい すごい熱が出て入院したのだから当たり前かもしれない しかもまだ一日目だし

安静にしとこかないとな 早く退院したいし

2. 事実

「小野さ〜ん 朝ですよ起きてくださいね」

病院では規則正しい生活が求められる

昨日よりは体が楽だ でもまだ熱があるみたいだ

「小野さん 朝ごはんです しっかり食べてくださいね」

俺は朝ごはんなんか日ごろ食べない というよりも食べれないのだ
朝はいつも食欲がない なのにここの病院ときたらしっかり出
てきやがる

こんなに食べれない でも食べるしかないのか

おっ意外においしいかも 病院の飯だから期待はしてなかったんだ
けど全然食える さすがに全部は食べれないけどこれなら半分以上
は食べれると思う

ごちそうさま 明日はもっと食べるようになるかな

コンコン 「どうぞ」

「祐介く生きてる」

入ってきたのは、吉田 智代 同じ学校に通っていて部活の仲間である 俺は、陸上部に入っている なぜ入ったかと聞かれると・・
・単に運動したかったから入ったのだ でも、結構楽しく部活はやっている

「おう なんとかな」

「急に入院って聞いたからびっくりしちゃったよ」

部活をしていたら気分が悪くなって早退して家に帰って病院に行って今にいたる

「肺炎だから仕方ないんだ 智は今から部活か？」

俺はこいつのこと智と呼んでいる 特に意味は無い いつのまにか智になっていた

「そうだよ 早く治してよね 大会までもうちよつとなんだからね」

あと一カ月もしたら地区予選がある これに勝たないと次の大会に進めないから大事な試合ある

「分かってるよ」

「結構元気そうでよかったよ 早く復帰してね」

「ああ 来てくれてありがとう もう部活始まるんじゃないか？」

遅刻すると顧問からの罰トレーニングが待っている 俺も何回かやったことあるけどかなりきついのだ 普通の練習よりしんどいのは確実である

「そうだ 早く行かないと 祐介 バイバイ」

走っていった 間に合うかな

見舞いに来てもらうというのはうれしいものだ

・・・

暇だな そうだ 大森 真央のどこ行ってみよう そういえばあいつの病室どこ？

看護婦さんに聞いてみよう

「大森真央さんの病室はどこですか？」

「404号室よ 行ってもいいけど無理しちゃ駄目よ」

4階か 俺の部屋は3階である どういう風に部屋分けしているんだろう？

エレベーターに乗ってと

ここか なんか3階とは雰囲気が違う なんとというか静かだ

コンコン

「どうぞ」

「よっ　今日は、俺のほうから参上した」

「祐介君く来てくれたんだ」

こいつは点滴してないんだな　何でだ？　ずっとしているタイプじゃないのかな

「点滴はしていないのか？」

「私は、朝と夜の2回でいいの」

当たりだ　移動とかは楽でよさそうだ　俺はずっとつけているから邪魔で仕方ない

「うれしいな　来てくれると思わなかったよ」

「まあ俺も暇だからね」

ほんと髪が長いな　きれいな髪だと思う　この病室は俺の部屋と微妙に違う　ベッドの隣によく分からない機械がおいてある　何だろう

「なんて呼んだらいい？」

「真央でいいよ 私の病室に来てくれたのは親と先生以外だったら 祐介君が初めてだよ」

お見舞いとか来てもらってないのか 友達とかいっぱいそうなた
イプだけどな

「友達とか見舞いには来ないのか？」

「私、中学のときも学校休みがちであんまり友達いなくて・・・高
校になってもすぐ入院しちゃったから・・・」

そうだったのか ずっと体が弱いのか いけないこと聞いてしまっ
たかも知れない

「そうだったのか ……ごめんな」

「ううん でも来てくれたからいい」

・・・

「そういえば祐介君は、何で入院してるの？」

「部活をしてたらすごくしんどくなって病院にきてみたら肺炎だつてよ 俺もレントゲン見たけど肺が白くなってたよ」

まあ医者が言うにはそんなにひどくないそうだが・・・

「そうだ 何か一緒にして遊ぼうぜ トランプかなんかで」

「えっ私が何で入院してるか聞かないの？」

「俺からは、別に聞かない だって話してるときくらい病気のこと忘れたいもんだろ」

「優しいんだね でも祐介君には教えてあげる 私は、心臓病なの」

心臓病 よく聞く病気だ 詳しくは知らないけど重い病気だというのは知ってる

「私の心臓はね　いつ止まっちゃうか分からないの　治すには手術するしかないんだって」

簡単によくそんなこと言えるな

「でも私にはその手術に耐えられるかどうか分からないの　しかも手術しても治らないかも知れないんだって　一ヶ月前に私ね一回手術する前に熱を出しちゃって受けられなかったの」

「・・・」

何を言ったらいいか分からない　そんな重い病なんて思ってもみなかった

「そういえば祐介君は何の部活してるの？」

「陸上部だよ」

「そうなんだあ　意外だなあ」

・・・

「ねえさつきトランプしようって言ったよね　しようよ」

「いいけど何する？　二人だし」

「じゃあ神経衰弱しよう」

「いいよ　負けないからな」

・
・
・

よし　こことここだ

あれ？　違う

「馬鹿だね　こっちだよ」

くそ　またとられた

・
・
・

「私の勝ちゝ祐介君弱いね」

「悔しい　ここまで圧倒されるとは思わなかったよ」

あっ点滴が終わってる

「点滴変えないといけないしそろそろ昼食だから部屋戻るな」

「うん　またね」

ほんとに元気そうなのに

・
・
・

「もう小野さん勝手に出歩いちゃ駄目ですよ」

「すみません」

怒られてしまった

3. 鈍感

昼飯も食べ終わり看護婦さんに熱をはかってもらうとなんと朝より少し上がっているのだ

「小野さん絶対に安静にしてくださいよ」

そんなにしんどいという感じは無いのだが仕方ない 少し出歩いた
せいだろう 寝よう 寝るのが一番だ

・
・
・

ん だいぶ寝たみたいだな 何時間くらい寝たんだろう

「祐介君点滴変えますよ」

もう変えるのか ということは3時間以上寝ていたということになる
それよりこの看護婦さん見たことないな

「今日から担当が私にかわったからよろしくね 祐介君」

かなり若い人だな

「そういえば祐介君、昼に真央ちゃんの病室に行ってたでしょ」

なぜ知っている？

「よく知ってますね」

「これからも行ってあげてね あの子今日はすごく明るかったのよ
あんなのは久しぶりよ あの子も私が担当してるの」

「そうなんですか」

いつもあんな感じじゃないのか まあしょうがないよな 重い病気
なんだもんな

「真央ちゃんずっと祐介君のことを私にうれしそうに話してくれ
るの だから体調がよかったら行ってあげてね」

「俺も暇ですからね 行きますよ」

話相手にもいいのだがなんといってもあの笑顔をみるとなんだか和む

・・・

ただいまの時刻午後5時 今日、母さんは仕事が忙しくて病院に来れないみたいだ 仕方のないことだ 母さんが働かないと収入がないから生活ができないのだ はやく親孝行できたらいいと思っている

ガラッ

「祐介君へ 遊びに来たよ」

いきなり入ってくるとは・・・ 俺がいかかわしいことでもしてたらどうするんだ 俺だっていい年なのに

「おいおいノックくらいしてくれないとびっくりするだろ」

「ごめんね 昼過ぎに会いに来ただけど寝てるっていうから」

まあ3時間以上寝ていたからな

「少し熱が上がったから寝てたんだよ でももう下がってきたから

大丈夫だよ」

「あっごめん 帰ったほうがいい？」

「いやいや 俺は全然大丈夫だから」

気を使ってくれたみたいだ 俺もこいつのところに行こうかなって思ってたし それにしても綺麗な髪だ

「真央って髪、綺麗だな」

「えっほんと？」

「なんかさらってしててすごく綺麗だよ」

会ったとき初めて思ったことが髪が綺麗だなんてことだもんな

「うれしいな はじめてそんなこといわれたよ さわってみる？」

「いいのか？」

「いいよ」

さっそくさわってみることに・・・

すごいさらっとしててなめらかだ

「さらさらだな」

「お母さんゆずりなんだよ」

「へえ そうなんだ 見てみたいな 真央の母さん」

俺は、髪がきれいな女性は好きだ なんだか和むというか変態なの
だろうか？

「私のお母さんは5年前に私と同じ病気で死んじゃったんだ」

いけないことを言ってしまった

「ごめん」

・・・

「ねえ祐介君は、陸上部で何してるの？」

「走ってる」

ひたすら走ってるのだ 多少の筋力トレーニングもあるが大半は走っている

「何に出るの？」

「100メートルと200と400にでるんだ」

俺は短距離にしか基本出ない というよりも出れないのだ 持久力が無いのだ でも短距離なら割と力がでるのだ 去年は、あと少しでインターハイだったので今年こそという思いは結構あるのだ

「結構いっぱい出るんだね」

「まあな はやく体動かさないと鈍ってしまうぜ」

試合まであまり時間が無いからほんとに早く練習しないと勝てない

「そうなんだ　じゃあ私、そろそろ部屋戻るね　またね」

「おう　また」

・
・
・

今日は体が軽かったな　治ってきているのだろう

点滴邪魔だな・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1257e/>

永遠に

2010年11月16日18時41分発行